

の龍岡藩ハレードはこの出兵から凱旋の模様を演じているものだ。

●諸藩に先がけて廃藩

明治維新の実現前後に乗謨は、松平の姓を藩祖堯祥の地大給(三河)にちなんで、「大給」に改め、さらに名も「恒」に変えた。

また、一八六九(明治2)年に龍岡藩の版籍を奉還し、さらに一歩進めて一八七一(明治4)年5月に廃藩を政府に申し出た。

直接の動機は龍岡城の築城による財政難にあったが、同時に新時代に即した国家体制の確立のためとしている。その建言書によると、「政権はようやく朝廷に戻ったが、軍事力はなお国内各藩にある。国家の体制を固めるうえにはまず軍事力の中央統一を図るため、各藩から統治権を返上させるべきだ」と訴えている。

これに力づけられた新政府は2か月後の7月、廃藩置県を断行、全封土を政府に返上させた。明治維新の大業も、これによってようやく完成した。

この建言によって大給は新政府に召しかかえられ、勲章制度の研究をまかされた。彼が登用されたのは、大給が幕府の陸軍総裁だった折に来日したフランス軍事顧問との交流を通じ、当時から外国の勲章制度に関心を持っていたためであった。



龍岡城五稜郭に現存する御台所と堀

●勲章制度と日本赤十字

大給は世界各国の勲章資料を集めて検討した。その結果、日本の勲章はあくまで日本古来の伝統をもとにしたものごと、外国の勲章にない日本独特の作成に苦心した。そのため彼は自ら筆をとって全勲章の図案を描いた。

勲章制度の確立とともに、大給は賞勲局総裁にも選ばれたが、これとともに忘れることが出来ないのが日本赤十字社だ。

一八七七(明治10)年に西南戦争が起こり、多数の犠牲者が出た。徳川宗族長に選ばれた大給は、旧大名

たちに呼びかけてこの救済を計画した。同じ思いを持った元老議員の同僚、佐野常民つねたみとともに博愛社を創設、その社則の第四条に「敵人の傷者といえども、救い得べき者は之を収むべし」と明記した。

これに対し、多くの人が反対したが、大給は「傷つて苦しむものは敵も味方もない。わけへだてなく救済するのが博愛精神だ」と外国の事例を説明、納得させた。

戦いのあと、博愛社は日本赤十字社となり、福祉事業などに尽力している。勲章制度や赤十字活動など、その功績によって大給は子爵から伯爵に昇進、晩年は明治憲法で国家の大事に天皇の諮問しもんにこたえる枢密顧問官すうみつこにも選ばれた。

明治以後、大給家と地元臼田との交流は途絶えていたが、一九八二(昭和57)年、百年ぶりに関係を修復した。現当主の大給兼龍は曾祖父の大給恒の遺志を継いで日本赤十字社に勤務、現在は東京はじめ、各地の臼田出身者が集う関東臼田会の会長を務め、親睦を図っている。

(中村勝実)

参考文献

- 榎元半重『大給亀崖公伝』、「大給亀崖公伝」再版委員会
- 中村勝実『もう一つの五稜郭』 樺
- 北野進『大給恒と赤十字』 銀河書房

佐久の先人たち④

五稜郭の築城、 日赤創設に尽した

おぎゅう ゆずる
大給 恒

(1839~1910年)



五稜郭といえば、全国ほとんどの人が函館と答えるが、それが信州にもある。佐久市田口の“もう一つの五稜郭（龍岡城）”は青年藩主松平乗謨（のち大給恒と改名）が、激動の幕末に築いたわが国最後の城である。

●期待のエース登板

乗謨の松平家は「大給松平」といい、徳川家康の五代前に分家した家系である。三河に四千石、佐久に一万二千石を領した奥殿藩（現在の岡崎市）だが、主力地に藩庁を移したいというのは、立藩以来の宿願であったが、幕府が諸藩に課した参勤交代制によって、それができなかった。

乗謨は幼くして蘭学、フランス語などを学び、その学習から洋式築城学にも目を開き、14歳で奥殿藩主を継いだ。

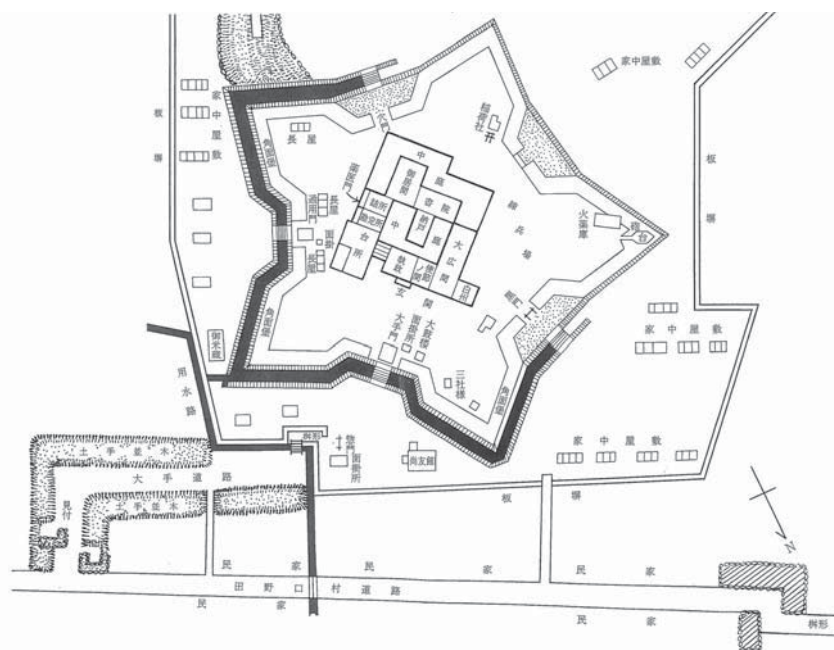
当時の幕府は、黒船の来航にはじまり、長州との戦いなど、内外の風雨にさらされていた。それに加えて、安政の大獄から桜田門外の変へ進むと、幕府の権威も地に落ちた。そのため、一八六二（文久2）年には参勤交代の制度も緩和された。これを待っていた乗謨は、翌年には三河から信州へと国替え、田野たのくち藩主となった。乗謨の素早い行動と、時局に対する開明に注目したのは幕府だった。討幕の嵐の中に立ち向かう期待のホープとして、彼はまず陸軍奉行に登用され、さらに若年寄から老中にも選ばれた。幕府の要職である老中は、譜代で五万石以上の大名から選ばれるのが通例だった。だが幕末で国家の危急存亡のとき、もうそんな規則にとられない時代となっていた。

●もう一つの五稜郭

乗謨が五稜郭の築城に魅力を感じたのは、幕府が北辺警備のため、函館に五稜郭築城工事に取りかかった一八五七（安政4）年ごろとみられている。

彼が学習した洋式築城が函館に実現するとあって、この頃からフランスの北方、リース市に築かれた五稜郭をモデルに設計図を描き、国替えが実現したら、すぐに築城への工事にかかることにしていた。

五稜郭は五角形の突端に砲台を置くことによって、



築城当時の龍岡城五稜郭平面図

敵の攻撃を死角なしに防ぐことが出来る、とした当時最新の築城法。城は国替え3年後の一八六六（慶応2）年には完成、御殿も翌年には出来上がった。乗謨、28歳のときで、藩名も龍岡藩たじのちに改めた。

一八六八（慶応4）年、戊辰戦争がはじまり、乗謨は老中を辞任したが、国内各藩の空気は一挙に佐幕から倒幕へと傾いた。龍岡藩にも官軍から出陣命令が出て、長岡攻撃の北越戦争に参加、6か月に及び従軍となり、同年10月に凱旋した。毎年5月、白田・小満祭